

「生活指導の一部としての読書指導」論

～昭和20年代学校図書館文献を中心に～

A Study on Reading Guidance as A Part of Guidance
in School Library Documents (1945-1954)

山口 真也

(yamaguchi@okiu.ac.jp)

はじめに

近年、総合的な学習の時間の本格的な始動にともない、学校図書館による学習指導機能が大きく注目されている。総合的な学習の時間への対応は、現代の学校図書館研究の主要なテーマであると言ってよいだろう。しかし、学校図書館の機能は学習機能だけではないはずである。「読書」は単に知りたいことを知るための手段だけでなく、広い意味での人格形成のための手段にもなりうる。先人の考えに触れることは日常生活のなかのモデルケースを得ることにもつながる。広い意味で学校図書館の働きには児童生徒の生活面に渡っての指導も含まれている。学校図書館研究の課題として、学校図書館における読書と生活指導との関係を論じることにも忘れてはならない。

学校図書館研究の分野において、読書に関する指導と生活面での指導との関係が本格的に論じられるようになったのは戦後まもなくの昭和20年代前半のことである。敗戦後の社会混乱は青少年の犯罪の増加という問題を学校教育現場に提起した。新教育思想への対応を迫られていた学校図書館関係者もまたこうした問題に対して「読書の効果」に注目することで、新しい図書館像を提起することになる。滑川道夫や阪本一郎らを理論的中心として「生活指導の一部としての読書指導」という考えが提唱されたのもこの頃である。新しい時代の学校教育では、読書指導とは「課外読物の選択指導であったり、国語教育の中における「読み」の指導」ととどまらず、個人の性格や生活環境を考慮して「適当な図書を、適当な読者に、適当な時期に与えることを原理」とする「読書を通じての人格形成を目指すもの」でなければならぬ¹。こうした考えは昭和22年3月から着手され²、翌年の昭和23年12月に公刊された文部省の『学校図書館のてびき』³の中にも明記されており⁴、それに続く学校図書館設立運動の中心的考えとなっていたことが分かる。

ちょうど敗戦直後の日本が青少年犯罪の増加を経験したように、現代においても、青少年の犯罪は深刻な教育問題、社会問題となっている。読書を通じた生活改善の効果は、現

代においても大いに注目されるべき研究分野であろう。本稿では、学校図書館における読書指導と生活指導の望ましい関係について考察するための第一の段階として、生活指導と読書指導が緊密な関係に位置付けられていた昭和20年代の学校図書館研究に注目する。戦後に発表された学校図書館文献を手がかりに、生活指導と読書指導が結合していく過程をまとめ、各学校において実践された読書による生活指導の方法を整理することによって、現代における「生活指導の一部としての読書指導」の必要性和問題点について考察することが本稿の課題である。

1. 「生活指導の一部としての読書指導」論の成立過程

1.1 『学校図書館の手引』による提案

図書館教育研究会によると、図書館における「読書指導」の重要性は、第二次世界大戦以前にすでに認識されたいたという。ただし、戦前の読書指導とは「読者の興味と能力とに応じて、個人的助言もしくは印刷された目録によって、かれらの図書の選択を方向づけること」、もしくは「課外読物の選択に関する助言指導」を意味していた。前者は「公共図書館活動における機能」、後者は「教科書中心時代の教育活動における機能」⁵であり、戦後の学校図書館設立運動において幅広く定義される「読書指導」とは区別されなければならない。戦後学校図書館文献の中で展開され、各学校において実践された「読書指導」とは、「読書の態度を涵養し読書の技術を身につけさせるかたわら、読書生活に必要な図書の選択力を育て、図書の分類法を知らせ、本の修理法を修得させ、読書衛生⁶に注意させ」るなど、生活に入り込んだ幅広い読書に関する指導として定義され、最終的には「豊かな読書生活をきづきあげる」ことによって「人間形成を達成しようとするもの」として定義される⁷。そして、この「人間形成」という考えは、昭和20年代半ばから後半にかけて、より具体的積極的に「読書による児童生徒の生活態度の向上」、または「読書を通じての不良化防止」を目指すことになる。では、読書指導を手段とする生活指導という考えは、いったいどのような理念の下で、また、どのような社会状況を背景として成立するのだろうか。

日本において学校図書館の設立が本格化するようになるのは、第二次世界大戦後のことである。戦後の民主主義教育への転換により、昭和22年に公布された学校教育法は、学校教育における教科書以外の図書の使用を容認した。このことは、特定の教科書を児童に与え、これを注釈し、解説し、暗唱させることを仕事としていた時代の学校教育は終焉を迎え、自らの生活や学習の中から生まれる課題を、それぞれの子供達が必要に従って主体的に解決するという学習のあり方が容認されたことを意味する。もはや教科書はこれらの個

別かつ多様な問題を予想し、その展開のあらゆる可能性に備え、その解決の個々の適切さを保障することはできない。教科書は「学習の手引き書」として役立てられるだけであり、子供達はその必要に応じて教科書以外にももっと多くの図書を利用しなければならない。つまり、民主主義教育とは、教科書以外にも様々な資料を集める学校図書館の設置を前提として成立するものであった⁸。「学校に生新のいぶきをかよわす学習の場は学校図書館」であり、戦後の「学校教育は、学校図書館の活動を除いては考えられない」⁹のである。こうした考えは、現代の学校教育における「生きる力」を育む教育、または、「情報リテラシー教育」といった課題に通じるものがあるだろう。

以上のように、戦後の民主主義への転換は学校教育に対して図書館施設の設立を求めるものであった。昭和22年の学校教育法施行規則第1条には「学校には、別に定める設置基準に従い、その学校の目的を実現するために必要な(中略)図書館又は図書室(中略)を設けなければならない」とする内容の設置義務が盛り込まれ、各地において学校図書館設立運動の気運が高まっていくことになるのである。しかし、昭和20年代、つまり敗戦直後の日本の状況を見ると、特に都市部では多くの学校が戦災に遭い、使用できる校舎は少なく、その復興もままならない状況であった。つまり、学習用の教室の確保さえ難しい状況にあっては、図書館の設置は夢のまた夢という厳しい現実があったのである。

こうした状況を背景として、戦後の学校図書館研究の中での「読書指導」の理念を大きく変える第一のインパクトとなったものは、昭和23年に滑川道夫氏や阪本一郎氏らが中心となって編纂、発表した『学校図書館のてびき』であろう。後に「日本の学校図書館の歴史はこの書の公刊とともに国民のものとなった」¹⁰と評されることになるこの研究書によると、「学校図書館は多くの方面や活動において生徒の興味を刺激し、豊かにする。一つの方面における興味が、他の方面に対する興味を刺激し、自発性と積極的活動とを発展させることがしばしばある。生徒を直接助けて、よい読書の習慣を発達させ、また、かれらの社会性と情操との発達を指導するためには、図書が多方面にわたっており、また注意深く選択されていることが必要であるが、同時に教師の周到的指導もまたこれに加えなければならない」とされ、学校図書館における読書の指導が生活全面に渡る指導に結びつくという基本的な考えが序論として述べられている。本論ではこの考えがさらに展開され、「読書指導には二つの面がある。その一つは、どんな本を読ませるか、どんな書物を選び、どんな風に与えるかに関する指導であり、他はどう読ませるか、どんなしかたと態度で読ませるかについての指導である。前者は、いわば「読書の方向」に関するものであり、後者は「読書の方法」に関するものである」。(中略)「この二つの面を結合して読書指導をするに当たって、たいせつなことは、読書指導というものを生活指導の一環として考える

ということである。すなわち、青少年の生活の中で「読書」という場面のみを抽出してこれを追及するというのではなく、常に生活全体を見渡して、いろいろの個性をあらわしながら伸びて行こうとする個人個人に、最も適当した読書生活のあり方を発見させ、これを身につけさせて行くということである」と述べられている¹¹。さらには、「どんなに優れた内容の本であっても、まちがった読み方をするとかえって有害なものになり、予期しない悪い結果をもたらす。ことに年少の児童には、おとなの読書の場合と違って、正しい読書の習慣を基礎的に養うことが特に重要である」¹² とする記述からは、学校図書館による読書指導が、敗戦後の混乱期に次々と出版された非科学的な漫画や冒険小説、少女向けの催涙小説が子供たちに与える悪影響を防止する機能を持つこと、さらに良書悪書を問わず読み方の指導が生活の充実改善につながるという発想が伺えるだろう。

こうした学校図書館における読書指導の生活指導上での重要性は、『学校図書館のてびき』以降に続けて発表される数多くの学校図書館文献の中でも取り上げられ、その理念が少しずつ整理されていくようになる。読書指導は具体的にどのような形で生活指導と結びつくのだろうか。『学校図書館』の手引き以降に発表される学校図書館文献の記述を手がかりに、読書指導と生活指導の接点をさらに詳しくまとめてみよう。

1.2 読書指導とガイダンス(個別指導・生活指導)の関係

『学校図書館のてびき』が提案した読書指導理念が広く定着していく社会背景としては敗戦後の社会混乱があったと考えられる。敗戦は、当時の社会に生活困難、不安を与え、犯罪件数を加速度的に増加させた。敗戦後の混乱の中で強盗や殺人、傷害などの事件が増加することはどの国にも共通することであるが、日本の場合は、特に青少年による犯罪が激増の一途をたどっていた点に特徴があった。滑川道夫氏が警視庁少年第二課の統計をもとに分析した調査によると、昭和15年度の青少年(20歳以下)の検挙者を100とすると、1948年には160を超える数値となっている。犯罪行為別にみると、窃盗(66.2%)、賭博(10.8%)、恐喝(6.7%)、詐欺(5%)、強盗(3.6%)の順で続き、他にも殺人、強姦、暴行、などの悪質化傾向、さらには、中学生の集団窃盗など、低年齢化傾向も見られた。この他、犯罪行為につながる不良行為の増加率は犯罪行為の増加率を遙かに上回り、中学生による盛り場の徘徊、映画館、ダンスホールへの出入り、喫煙、家財持ち出し、家出、売春なども見られた¹³。

以上のように、敗戦による社会混乱は、それまでの日本社会が経験したことがなかった青少年犯罪という問題をもたらした。滑川道夫氏は、これらの犯罪行為とその温床となる不良行為の多くが中学生の時期に開始することに注目し、不良少年少女が増加する原因の

一つは、学校教育の貧弱さにあると指摘する。そして、不良少年の増加は教育危機の象徴であり、その原因と解決手段として、読書行為の影響と効果に注目するのである。読書から人は様々なことを学ぶ。その反面、悪いことも知ってしまう。戦後に出版される少年少女小説やカストリ雑誌¹⁴などは子供達の成長において悪い影響を与えることもあるだろう。つまり、本の読み方を誤ることは人生を誤ることにもつながってしまうのである。

一方、読書は不良化の原因となるだけでなく、余暇時間を楽しく健全に送る上で、スポーツと並んで有効な方法となりうるという性質を持つ。「余暇を健康的に文化的に高尚にするよう指導する中に、読書による指導ほど、(中略)重要なものはない」¹⁵。しかし、児童生徒の中には与えられた「余暇時間をどのようにして有効に過ごすかということ」で迷っているものも多い。「感受性強く善であれば何れにでも簡単に染まってしまう青年前期」の子供が、「余暇に何もすることがないという事程、危険なことではない」¹⁶。つまり、余暇時間を有意義に過ごす方法を知らない子供は非行に走りやすい。ならば、学校教育は、読書を通じて児童生徒が「知識の獲得のみでなく、健全な情緒の満足」を感じるように指導する必要がある¹⁷。

とすれば、図書がほとんど唯一のメディアであった時代において、読書への正しい態度を教え、本の内容を正しく読みとる力を養うことは、青少年の不良化を防止する上で、学校教育の重要な課題となるだろう。ここに学校教育における読書指導の重要性が浮かび上がることになる。「読書はその人の将来をも左右する。読書生活はその人の一生に広く深い地位を占める。ここに正しい読書指導の重要性がある。殊に出版界の混乱状況にあってはその指導はいっそう重要」となるのである¹⁸。

もちろん、これまでの学校教育の中でも、読書に関する指導は行われてきた。しかし、従来の読書指導は、国語科を中心とした読書法、読解力の指導という技術的な範囲にとどまっていた。もちろんそうした技術的な指導も必要ではある。しかし、読書とはそもそも生活の中に存在するものであり、上に見たように、生活を豊かにしたり、貧しくしたりする方法でもある。とすれば、読書指導は、読解力指導の次の段階として、具体的な生活場面と結びつけて議論される必要がある。「生活に必要な読書力は、生活の中で育てられなければ、身についたはたらきができない」¹⁹。つまり、読書指導とは、「現在および将来の生活の中で必要とされる読書に関する態度、習慣、技術、知識、能力を指導すること」であり、「読書に関する生活指導」と言い換えなければならない²⁰。ここに、読書指導は、「単に本のよみ方を指導するというせまい意味でなく、生活の中の読書の指導という広い意味だということ、つまり生活指導の一環としての読書指導」を意味することになる²¹。滑川道夫氏の言葉を借りれば、「読書指導」とは、単に「本の読み方というの指導」では

なく、「ひろい生活指導のひとつの分節として存在する」のである²²。こうして学校図書館は「学習の場」という機能に加えて、「ガイダンス(個別指導・生活指導)の場」としての役割を担うことになる。

では、「生活」というキーワードによって再編される読書指導とは具体的にはどのような内容であったのか。新しい読書指導の考え方について、図書館教育研究会は「読書による精神的健康の増進が計画される必要がある」と述べている。従来の読書に関する指導は生活問題と切り離されたがゆえに、「発達上必要な読書活動のすべてにわたって、指導されることが、従来はなおざりにされていた」。たとえば、上に挙げた読書による悪影響の問題についても、「子どもたちがつまずいてから、あわててその道の通行を禁止するようなビホウ策(弥縫策)しかおこなわれてこなかった」のである。これに対して、新しい読書指導は「もっと積極的で包括的な立場をとる」。実際の生活の中で子供達が道を踏み外す前に読書に関する指導を行う。「読書指導は、単に読書することの指導ではなく、読書によつての生活指導である」²³。こうした考えの下で、読書に関する指導は、民主主義教育における自主学習や生活課題の解決のための指導、読解力の指導に加えて、児童生徒の不良化を防ぎ、生活態度を改善する生活指導のための教育法として注目され、学校図書館設立運動の中に取り込まれるようになる。

2. 「生活指導の一部としての読書指導」の内容

読書指導は生活指導の「一環」「一分節」、つまり一部分を成す。戦後学校図書館文献の中で、「何をどう読むか」という指導は、生活指導と結びつけられ、児童生徒の生活をよりよい方向へと導くものであると考えられていた。では、実際の図書館活動の中で、生活指導の一部である読書指導とは具体的にどのような理念の下で展開されて行ったのだろうか。「読書指導による生活指導」という考えを全面的に展開した図書館教育研究会の議論を中心に、当時の文献からその指導内容をまとめてみよう。

2.1 「良書」を与える

不良化防止策としての「読書指導」においてもっとも基本的な考えとなるものは、「健全な余暇時間を過ごさせることが子供の不良化防止にもっとも効果がある」という発想である。上述のように、当時の学校図書館研究では、本を読むこと、「読書」という行為は、スポーツと並んで、生活改善・生活向上にとってもっとも効果的な方法の一つであると考えられていた²⁴。よって、児童生徒が余暇時間を読書にあてるように指導することは、生活指導上、大変効果的な不良化防止法になる。

児童生徒にとっての「悪書」の悪影響は、現実の青少年事件にもみることができる。たとえば、中野区の中学2年生を頭とする不良団が『怪盗赤卍』という長編漫画から手口を覚えて窃盗を行うという事件が起こっている。孤児物語を読みふけていた池袋の少年は、実母を継母と思いこんで家出をしている。エログロの雑誌を手当たり次第に読んでいた結果、遊里に出入りするようになった少年もいる。「ルパンを読んで、実際にその筋を運んでみようとしてつかまった話もある」²⁸。そして、昭和26年にはさらに不幸な事件が起こっている。「催涙小説」と称される少女小説を読みふけていた世田谷区の中学3年の女生徒が、「継子いじめ」の話に感化され、友人達に自分が継母にいじめられて生傷が絶えないと吹聴してまわった。友人達は彼女にいたく同情し、なんとかして親の虐待から救おうと盛り上がるのだが、そこで嘘がばれてしまう。結局、引っ込みがつかなくなった彼女は死を選んでもしまうのである(資料参照)²⁹。こうした事件が続く中、当時の世

■資料「催涙小説による中学生少女自殺事件」³⁰

少女感傷の死
級友についたウンが判り

大正十四年四月一日
早稲田大学出版部
著者：早稲田大学出版部
発行所：早稲田大学出版部
印刷所：早稲田大学出版部
代印：早稲田大学出版部

市井の噂では、○さんは二月廿日午前四時頃、東京府下町区某所の路端にて自決したといふ。ウソの噂をきいてゐたが、友達に借用され、そのうち自分もそのウソの話を案外思ひこんでセンチになり、深夜の静寂で一人一人の面影を憶へる事が多くなつた。同僚した級友が「私達の手を助けた」と担任の先生に相談を持ちかけた。ウソだ、級友達が言ひだされたのをきいて死を選んだもの。

市邊の頭へでは、**■**さんは、二月如きの、**■**さんの四郎でなく私は何時も感得たナマの跡がえなない」というウソの話をくりあげたが、友達に信用され、そのうち自分もそのウソの話を疑念を抱いてこんでセンチになり、旅館のスイでたゞ一人の娘にひきよけることがまくなつた。同僚した級友が「私をの手を助けて」と担任の先生に相談を持ちかけたため、ウソだらけ、級友すら責められたのまじしで死を志したもの。

論は少年少女小説を「悪書」と断罪し、出版禁止、もしくは青少年による読書禁止を強く主張することになる。

しかし、児童生徒から「悪書」と呼ばれる図書を取り上げることは、問題の解決方法としてそれほど有効ではない。禁止されれば、ますます読みたくなるのが心情で、結局子どもはそれらの本を隠れて読むだけである。一部のジャンルの読書を制限することは「はしかに皮膚薬を塗るようなもので（中略）、禁止による指導に効果のないことは、繰り返すまでもなからう」³¹ という意見もある。

一方で、敗戦後の出版状況の多様化、混乱の背景には民主主義への過度的な模索もあった。こうした時期に出版社に対してやみくもに出版禁止を求めることも実効性が薄い。そもそも、漫画や催涙小説の類はどれも同じような内容であり、それほど興味関心が長続きするものではない。例えば漫画についてみると、確かに終戦直後に漫画が出始めた頃は、よい子も悪い子も漫画を一様に読んでいたが、昭和20年代半ばから後半になると、あまりにも過剰な状態になったことから、都市部を中心に「そろそろあきる」という傾向が一般的となってきた³²。愛知県の大口北小学校での「漫画を討議する会」では、「漫画ばかり読んでいると勉強したり、お手伝いしたりするのがいやになる」「本当にできないことや、でたらめのことがかいてある」「バカヤロー、ギョッ、テメエ、コンチキショーなど悪い言葉を覚える」という批判的な意見も児童の中から出てきている³³。その一方で、昭和20年代も後半にさしかかると、「児童向け図書の中にもずいぶんとよいものが生まれている」³⁴。

こうした問題を考えると、教育者は「子供が漫画や冒険小説に熱中するからと云って、いやに神経をとがらせる」ことよりも、「悪書」から「良書」への読み物の選択方向の修正にその関心と熱意を示すことが当然であるということが分かる³⁵。図書館教育研究会は次のように言う。「強い興味を弱くすることはむずかしいが、弱い興味を強くするのは比較的簡単である。かれらがよみふけている望ましくない図書を禁ずるよりは、他の望ましい図書への興味をはげますべきである」³⁶。つまり、適当な時期に、これらの「悪書」に代わるその他の読み物をすすめることで、子供たちが自ら悪書の本質に気づき、自ら近づかないような読書態度を指導する必要があるのである。抽象的ではあるが、「正しい、美しい、意味深い所望に多くふれていると、そのおもしろさ、よさ、味といったものが次第に理解され、くだらないもののくだらなさが自然と分かってくる。よくないものにおぼれたものを救う道は、正しいもの、美しいものをつつんでやるほり外にない」³⁷ のである。「悪書」におぼれた子供たちに対しては、その「不振な方向に動機付け」し、「みずから新

しい分野に興味を発見して、視野を広げさせるようにする」³⁸ ことが読書指導の役割である。

こうした方法は、一見、きわめて消極的なやり方にみえるが、「子供の書物に対する目が大きく開かれて行くことは、結果的にみてカストリ出版社から頭を押さえつけることなどとは比較にならないほどの収穫がある」だろう³⁹。具体的には、児童生徒に良書を推薦するだけでなく、「雑本のはびこる現在の読書環境の中にあってもめげず、それらを充分批判し、何が生活を深化させるに価値あるものかを、会得する態度を養成する」ことも必要となる⁴⁰。東京教育大学内児童研究会は次のように記している。「禁止で子どもの生活が健全に指導できると思ってはならない。もっとだいじなのは、はじめから、有害な本には近づかない態度を子どもにつけることである」⁴¹。

2.2 図書を正しく読み取る方法を指導する

以上のように、「悪書」の問題点を認識し、それに代わる「良書」を与えること、それが学校教育のなすべき読書指導の第一の方法であった。しかし、「良書」を読むことがすぐに児童生徒の不良化防止につながると考えることは早計であるという考えも当時の文献をさかのぼるとすでに確認することができる。確かに、「良書」には様々な効果がある。しかし、現実の事件をみると、読書の影響を受けて不良行為に走る児童生徒は、必ずしも世に言う「悪書」だけを読んでいたわけではないのである。

たとえば、中学生2名は、『コロンブス』を読んで、千葉の海岸からボートをこぎ出し、沖合7キロを漂流しているところで発見されている⁴²。『ロビンソン漂流記』を愛読していた14歳の少年が、冒険小説家になるための実地勉強と称して家出をし、盛り場をうろつきまわり、夜は駅の車庫で寝ていたという話もある。ステイーブンソンの『宝島』を読んだある生徒は、「宝島を実際に自分で探検しようと思い、千葉の海岸から伝馬船に乗って、十日分の食料を積んで出発」し、沖合で発見されている⁴³。

とすれば、世に言う「良書」だからといって安心して子どもに与えてよいというわけではないはずである。よって、学校教育は、児童生徒が図書を正しく読みこなすことができるように個別に指導する必要がある。ここに、図書の内容を正しく読みとる方法を指導する、という第二の読書指導の役割が見えてくる。

2.3 生活指導へと引き継ぐ

以上のように、当時の文献をみると、「良書」を与えること、そして、その読み方を指導することが、読書を原因とする不良問題を解決する一つの手段と考えられていたことが

分かる。ただし、現実にはこれらの指導によって全ての不良問題が解決されるかと言えば、それは難しいと言わざるを得ない。このことは当時の一部の文献でも指摘されており、たとえば、図書館教育研究会の阪本一郎は「これらの子どもたちの非行はけっして本によってのみ動機づけられたものではなく、かれらの生活環境にもっと強い動因があるのであって、たまたま本がその場にありあわせたにすぎない」⁴⁴と指摘している。つまり、「不良化の要因が読書にあることがはっきりと論証されているわけではない」のである。もしかしたら、子どもが家出などの動機を説明するための便宜として読み物のことを引き合いに出した可能性もある⁴⁵。

一方、上記の催涙小説を読んで自殺した少女の事件について、滑川道夫氏は「こうした場合、罪は少女小説にきせられる（中略）のが普通であるが、問題それ以前にある」と述べている。つまり、「この少女の精神的状態は、この小説を読む前にすでに異常を来していたのであって、それをなおすための指導がなされるべき」であり、「精神的健康さえ保たれていれば、いじめの話を読んでも、あんな受けとり方をするはずがない」のである。「自分は継子ではないのにこれに共感したというのですから、その少女の心理状態はすでに変調を来していたのであって、自殺の原因は小説にあっても、遠因はもっと以前にある」⁴⁶。とすれば、大切なことは、「読書を自分の精神的健康に応じて選ぶこと」⁴⁷であり、「親も教師も、早くこの少女の精神的症状に気づいて」あげるべきだったのである。

このように、読書は単に不良行為を誘発する外的要因にすぎない(場合もある)。健康的ではない精神状況において、いくら「良書」をすすめ、その読み方を指導しても効果は少ないだろう。真の原因を究明し取り除く努力がなければ、児童生徒の不良化問題は解決しない。こうした点で、読書指導には限界があり、生活指導は、読書に関する指導に終わることなく、日々の生活面での助言、指導へと引き継がなければならない。このように、戦後の「読書指導」は、生活指導の「全部」を肩代わりするものではなく、「一部」であり、ここで言う「一部」が、単に「一つの手段」という意味だけではなく、生活指導の「一分節」（他の指導と連動している）という意味も含めて使われていることが改めて確認できるのである。

2.4 読書の効果による不良化防止・生活態度改善

学校図書館設立運動の中の読書指導は、当時、社会問題となっていた読書による青少年の不良化を防ぐ一つの有効な方法、手段と考えられ、生活指導の一部(一分節)として位置づけられていた。そして、こうした読書指導に関する考え方は、時間がたつにつれて、さらに能動的、積極的な性質を備えるようになる。先の催涙小説による少女自殺問題に触

れて、滑川氏は原因の解明に加えて、「その治療に効果のある読書をすすめるべきであった」⁴⁸と答えている。つまり、読書指導は、単に「読書による悪影響を防ぐための指導」という領域を越えて、読書行為の様々な効果によって、問題児の性格や生活態度を矯正するものである、という考えが生まれてくるのである。読書による精神状態の改善という考えは、現在で言うところの「読書治療」⁴⁹につながる考えであると言えるだろう。

たとえば、京都市立修徳小学校校長の井内龍二氏は次のように語る。「読書指導は、読書の技能を発達させ、向上させるそのことだけが目的ではない。さらに必要なことは、読書活動を通しての生活指導でなければならない。すなわち、読むことの指導によって、子どもたちの心身を健全に発達させ、調和のある完全な人格を形成しようとするところに究極の目標をおくものである。こうした点から考えると、読書は、児童の生活を指導し、人格を形成させるための一つの手段としてとりあつかわれる」⁵⁰。

当時の文献から、図書館教育研究会らの考えをまとめると、読書には生活態度や性格の改善指導において以下のような効果があるという⁵¹。

- 1) 先賢の胸奥にふれて自己を反省する機会を与える・社会生活に必要な行動様式を知り、無用の錯誤をさける
- 2) 多くの人と共に図書及び図書館を利用することによって共同生活を体験させる・公共物の利用によって遵法の態度を身につけさせる
- 3) 慰安を求めて精神的緊張を解消させる
- 4) 自発性に基づいた活動の効果を自覚させる
- 5) 健全な趣味を発達させる
- 6) 図書終わりまで読み通すことで一つのことをやり通す持続力を育成する
- 7) 児童生徒がその個性を自覚してそれを意識的に伸ばしていこうとする積極的な態度を読書を通して育成する

生活指導の一部として実践される読書指導は、特に内面への指導に重点を置き、読書の効果によって生活態度の改善と向上を目指す。当時の学校図書館文献からその実践例をみると、たとえば、大分県の田染小学校では、成績もよく、優しい性格ではあるが、明るさを欠いた子供には、「ユーモア小説」を与えることで、自然に明朗性が増すようにと導いている。「すさんだ心、さびしい子供」には、あたたかい情操を与えることが必要である。そのためには文学書がよい。世界名作などの文学書を与えることで、「生き生きとした素直な子供へとしたい」⁵²。また、読書行為は生活における興味関心の広がりにもつながるといふ側面もある。狭い視野にとらわれず、広く世の中を見ることは、中高生にとって将来

の指針を決める上で大変重要であるだろう。読書指導は不良児救済やそれに続く職業指導の方法としても大変有効である。

昭和20年代の読書指導は、単に「悪書」「良書」による悪影響の防止という受動的な機能にとどまらない。読書指導は、児童生徒のそれぞれが備えている性格や生活環境を考慮し、その人格形成においてふさわしい図書を与えるという、より積極的な機能を持つことになる。こうして、学校教育において、生活指導領域における読書指導の役割は、読書の悪影響を取り除くことで不良化を防止しようと考えられていた頃よりもさらに大きなものとなっていくのである。

3. 「生活指導の一部としての読書指導」の実践例

以上のように、昭和20年代において、読書指導は生活指導を行う上で様々な効果を持つことが提案された。当然、豊かな読書指導を実践するためには児童生徒が一日の大半を過ごす学校において豊富な書物が整備されていなければならない。こうして読書指導は学校図書館設立運動の中で生活指導領域と密接に結びつき、一部の学校図書館において先進的な試みがなされるようになる。次に、昭和20年代の学校図書館文献を手がかりに、学校図書館における実践例から当時の読書指導の具体的な方法、特徴をみてみよう。

3.1 学級担任による読書指導

読解力や読書技術の指導を越えた、生活に直結する読書指導は、児童生徒のための読み物を豊富、かつ身近に揃えた「図書館」の必然性を高めるものであった。しかしながら、こうした考えは、学校図書館には専門職としての図書館員(司書教諭)が必要であるという発想には必ずしもつながっていない。もちろん、図書館員の仕事は読書指導だけではない。当時の文献でも、その他の業務(目録や分類作業、読書衛生に関する利用指導など)を担当する人員として、専門的知識を持つ図書館員、司書教諭の設置は求められている⁵³。ただし、生活指導の一部である読書指導という仕事に関しては、必ずしもその仕事を図書館員、もしくは司書教諭(だけ)が行わなければならない、という発想は見られないのである。当時の読書指導は学校図書館の必要性を支える要素ではあったが、厳密には図書館員の必要性を支えるものではなかったとも言えるだろう。

では、読書指導は誰が行うべきなのか。当時の文献によると、読書指導は教員が、具体的には、それぞれの児童生徒の「学級担任」が行うべきであるという考えが多く見られる。もちろん、昭和20年代の大部分は学校図書館法の公布(昭和28年)よりも前である。つまり、専任の司書教諭は当然のこと、専任の事務職員も確保することができなかった時代であ

る⁵⁴。とすれば、満たされない現実に対する代替案として、教員による読書指導が提案されたとも考えられるが、当時の文献にみる「読書指導は学級担任が行う」という記述からはそうした消極的な考えはあまりうかがえない。生活指導の一部として位置づけられる読書指導については、むしろ積極的に、学級担任や生活指導主任を含む教員全員が責任を持って行うべきと考えられてさえいるのである。

例えば、青森高等学校では、読書指導の基本となる良書の選択について「図書費の中から各教科担当職員に1万円づつ配分して図書購入と読書指導に全職員を協力させる」という方針を打ち出している⁵⁵。また、秋田県角間川中学校の研究報告書では、「専任司書をもうけない(もうけるべきではない)」という方針を挙げ、「図書館教育の達成は一部職にまかせることなく全職員が同一程度に関心を深めることで(中略)達成される」と述べられている。読書指導が、児童生徒個人を対象に生活指導の一部として行われる場合には、図書館員はカウンセラー的な仕事もかねており、本来そうした指導業務については「HRT(ホームルームティーチャー)がその最も重要な役割をもつものであり、もたなければならない」はずである。仮に、図書館に専任の図書館員(事務職員)、司書教諭や係教諭が配置されているとしても、「読書指導は、一人の手によって徹底するものでなく、多くの協力参加がなければ不可能である」⁵⁶。日常的な業務だけでも係教官、図書館主任の労力は大きい。その上、児童生徒を個別に対象とする読書指導を一人(もしくは数人)が背負うとすれば、図書館に関わる教職員は疲労困憊の末倒れるか、でなければやがて図書館から脱走してしまうだろう。「学校図書館は全職員のものでなければならない」⁵⁷。ここに、生活指導の一部としての読書指導を実践する理念として、「全員司書」という考えが成立する⁵⁸。生活指導の一部として読書指導を行うという考えに従えば、児童生徒の生活指導に深く関わる学級担任や生活指導主任等が図書館業務に関わることは当然の帰結と言える。

3.2 閲覧票の記入

各教員が児童生徒個人の環境や成長に適した読書指導を行うためには、当然、彼らの身近な場所に豊富な資料が備えられてなければならない。昭和20年代の生活指導と読書指導、そして学校図書館との接点は第一に豊かな資料を提供するという機能にあったと考えることができる。ただし、当時の学校図書館文献を読むと、読書指導において学校図書館が果たした役割は単に資料を提供することだけではないことにも気付かされる。

すでに述べたように、当時の読書指導は第一に読書による悪影響を防ぐために行われるものであった。当然、読書指導を担当する教員は、児童生徒各自がどのような読書環境にあるか、どのような本を読んでいるか、ということを知る必要がある。学校内で児童生徒

が最も多く図書に触れる場所は学校図書館であるから、読書指導担当者(つまり学級担任など)は、そこで児童生徒がどのような本を利用しているかということを把握しようと試みる。学校図書館は資料を提供するだけでなく、児童生徒個人がどのような本を読んでいるかという読書に関する情報を読書指導担当者に提供する役割も果たしていたのである。

当時の読書記録の収集方法をみてみよう。戦後の学校図書館文献によると、早い時期から無償での貸出サービスが実践されていたことが分かるが、当時の貸出方法は、現代とは異なり、記帳式もしくはカード式であったため、貸出記録は図書館日誌や貸出簿、個人貸出カード⁵⁹などの形で学校図書館内に残されることになる。個人指導用資料として収集、使用されたものは第一にこれらの貸出記録である。一般に、当時の貸出業務は図書委員によって行われていたが、一部の学校では、「週番制」などの持ち回りで、学級担任がこれを行っており、貸出記録が読書指導のための個人指導用資料に直結していたことも分かる⁶⁰。

個人指導用資料としては、貸出記録の他に閲覧記録も多く使用されている。閲覧記録とは、利用者が学校図書館内でどのような本を手に取り、読んだのか、という記録である。現代の学校図書館では書庫からの出納や特殊な資料(AV資料など)の場合を除いては、館内での閲覧に際して帳簿やカードなどに読書記録の記入を求められることはない。しかし、当時の学校図書館では、入館の際に、カウンターにて(もしくは備え付けのカードボックスから)閲覧票を受け取り、利用する書名を記録し、係員に提出してからその図書を読むか、あるいは、退館の際に利用した資料を閲覧票に記入して係員に渡して行くことが義務づけられていたのである。当時の学校図書館の多くは自由接架方式を採用しており、本来は記録を収集する必要はなかった。このことから、閲覧票の記入義務が、読書指導を目的として行われていたことが分かるだろう。

例えば、東京学芸大学第一師範学校附属小学校では、「児童は図書館に入ると、まず右図のような図書閲覧票をとり、書架に接して図書を選択して閲覧する。読み終えて返す際に票に当該事項を記入し、(中略)係員または図書委員に渡す。(中略)閲覧票によって種々な統計をとることができる。なお閲覧票は団体、個人を問わず記入することとしている」とある⁶¹。東京都(?)の第一中学校でも、書架から本を取り出すたびに閲覧票の記入を義務づけており、その目的について、「この票を見れば自分がどんな本を読んだかの記憶にもなり」、教員が「その人の読書傾向がわかってよい指導ができる」と考えられている⁶²。この他、当時の学校図書館利用案内等を調べると、そのほとんどの学校において、館内閲覧の際に、閲覧票の記入が義務づけられており、その目的が生活指導に連結した読書指導資料を集めるための個人読書記録の収集にあることが分かる⁶³。

■資料 2 読書カード

図1 「個人別閲覧票」⁶⁴

[illegible]

図3 「閲覧カード」⁽⁶⁾

[illegible]

図2 「読書カード」⁶⁵

読書カード			
なまえ (三ノ一	月	号
		日より	本の名
		月	
)		日まで	
○			
読 書 票			
月	日	(号)	
本 の 名			
なまえ			

この紙は大せつにしまつて
おく
(浜松市追分校)

自由接架式にもかかわらず、棚から取り出すたびに閲覧票を記入するというのは利用者にとっては大変不自由である。しかし、個人の読書生活を管理し、指導することを目指していた当時の読書指導の考え方から見れば、こうした作業もまた利用者にとって当然の義務ということになるのだろう。

3.3 読書ノートの記入

学校図書館において集められる貸出記録や閲覧記録は、読書指導担当者にとって、個人の読書歴を知るための重要な手がかりとなる。しかし、読書を通じての生活指導を考える上でもっと大切なことは、その児童生徒が何を読んだか、ということではない。すでに述べたように、児童生徒は「良書」からも「悪書」からも不良化のきっかけを得る。読書指導資料を集める上でもっとも大切なことは、その児童生徒が、図書の内容を正しく読みとっているか、間違った理解をしていないか、批判的・批評的な読書ができているか、といったことを把握することである。しかし、貸出記録や閲覧票からはその本を最後まで読み、どのように受け止めたか、また、自分自身の問題としてどのように考えたか、ということを知ることは難しい。「児童生徒がどのような図書を、どのくらい読んでいるかは帯出者カードを見れば判るが、その読書の質の問題になると、それほど簡単ではない」のである⁶⁷。たとえば、児童生徒は借り出した本を読まずに返すこともあるし、書架から取り出した本をすぐに戻してしまうこともある。単純に自分の趣味に合わなかったためすぐに書架に戻すこともあるが、そこには「読書遅滞」や「読書不振」といったいわゆる「読書病」を煩う児童生徒が含まれているかもしれない⁶⁸。

こうした問題をふまえて、児童生徒各自の図書内容についての理解度をみる最もよい方法として登場するのが「読書ノート」の記入と提出である⁶⁹。たとえば、金沢市立中村町小学校では、読書ノートの効果について、「教師にとっても個人に指導上きわめて重要な資料で、どの程度に図書館を利用しているか、どんな読書の傾向が生じているか、どのように感じているか、など読書指導上きわめて重要なことがらがふくまれている」⁷⁰と考えられている。それと同時に、読書ノートの記入には「読書した後で、読んだことをまとめて書きつけていくことは、子どもたちの読書に対する関心をふかめ、読書力をつけていく上に大きな効果のあるものである」という効果もある⁷¹。つまり、閲覧票や貸出記録だけでは、本当の意味での生活指導としての読書指導は不可能である。児童生徒は「個人別読書カードを作り、月毎に学校図書館に出し、ホームルーム教師と共にその読書傾向を調べ補導してもらう」⁷² 必要があるのである。

もちろん、こうした読書ノートの記録には一定の読み書き能力と労力が必要となる。よって、読後感の記録を強要すると、児童生徒は「それを苦にして読むことをいやがるようになったり、かくれて読んだりするようになる。本は読みたいが感想を書くのがいやだということにならないとも限らない」のである⁷³。とすれば、読書指導担当者は、始めから立派な読書ノートを書かせることを期待してはならない。学齢に応じて、低学年の間は、読後に感想を聞くだけにとどめたり、書名、著者名、読了に要した日数など、簡単な情報の

みを項目とする読書カード(図参照)の記入からはじめ、段階的に読書ノートの記入へと発展させていくということも考えられている⁷⁴。とはいえ、生活指導の一部として位置づけられる読書指導にとっては、読書のレベルを知ることができない閲覧票や貸出票だけでは十分ではない。「結局、読書指導の出発点は読書メモ」⁷⁵なのである⁷⁶。

こうした考えの下、昭和20年代半ばから、学校図書館を中心とした読書指導では、読書ノートの記録指導が盛んに行われるようになる。当時使用または考案されていた読書ノートは一般に以下のような様式であった。

■資料3 読書ノートの様式 (一例)

図1⁷⁷

第一圖

圖書閲覧表	
読者	
書名	
月日	
年組	男 女
氏名	
圖書番	
感想	

図2⁷⁸

ラベル	A	B
C	月 日	D 月 日 ページ
E		
F		

A 書名(本の名) B 著者名(かいた人の名) C 読みはじめの日、D 読み終つた日、E この本のあらまし、F 読んだあとの感想

図3⁷⁹

(読書カード記入用紙)

冊数	図書番号	書名	著者名	読者名	月	日	ページ	備考
28	100	地球の歩き方	丸井 隆	山田 太郎	9	15	100	読了
10	101	地球の歩き方	丸井 隆	山田 太郎	9	16	101	読了

(読書カード記入用紙の記入方法)
 1. 読書カードは、図書番号、書名、著者名、読者名、月、日、ページ、備考の8項目を記入する。
 2. 読書カードは、読書指導の記録として、読書指導の進捗状況を確認するために使用する。
 3. 読書カードは、読書指導の記録として、読書指導の進捗状況を確認するために使用する。

図4⁸⁰

第12図 読書ノートの一形式

第六章 読書活動における読書指導	○本をよんでかんじたこと ○よんだことかいてあったか よんだ本 よんだ日 かんじたこと よんだ人	よんだ本 よんだ日 かんじたこと よんだ人
---------------------	---	--------------------------------

15 書誌技術の指導

6	5	番号	
日	月	日	
			調べる問題
			読んだ本の名
		上	け
		中	つ
		下	か
			備考

○調べる問題を研究したとき読んだ本を書く欄

社会科学や理科など自分で問題を研究する時に使いましょう

MEMO

26	25	番号	
月日	月日	めだ日	よみ始
		番分	号類
		本を書いた人(著者)	
		本の名まえ(書名)	
		つ	よみ終
		よ	かた
		ふつつ	
		よくない	
		備考	

◇大阪市小学校教育研究会学校図書部専門委員会制定読書ノート様式(大きさはA5判)

○自由に読んだ本を書く欄

第四章 読書指導

(左 頁)

かりた日	本のなまえ	分類 (ぶんるい)	かいた人のなまえ
かえした日			本を出した会社

(右 頁)

か ん そ う	よ ん だ ば し ょ	⑤

◇八王子市立第五小学校 読書ノート 様式

(大きさはB6判)

184

图 2⁸⁴

讀書カード		氏名			
発行所	著者	書名	読み始め	読み終	
			月	日	日

☑此のカードを使い切つたら先生にさし出して新しいカードを作つて頂きましょう

4. 「生活指導の一部としての読書指導」の現代的意義と問題点

以上のように、昭和20年代の読書指導は、読書の悪影響を防ぎ、生活態度を改善する機能を持つものと考えられ、生活指導の一部として位置づけられていた。当時の学校図書館文献を振り返ると、こうした考えは一部の先進的な学校において展開され、閲覧票のや読書ノートの記入、学級担任による積極的な指導など、学校図書館黎明期において読書指導論もまた試行錯誤の中で具体的な方法論が確立されていったことが分かる。最後に、「生活指導の一部としての読書指導」の現代的意義と問題点について考えてみよう。

4.1 「生活指導の一部としての読書指導」の現代的な意義

言うまでもなく、学校図書館は学校の一機関である。学校とは教育機関である。教育とは、児童生徒の豊かな人格形成を目指す機能である。ならば、学校図書館もまた本質的には同様の機能を持つことになる。こうした性質を考えるならば、学校図書館の様々な機能を、児童生徒の人格形成に大いに役立てようという発想は不自然なことではない。特に、戦後の学校図書館設立運動においては、学校図書館がいかに学校教育にとって必要不可欠であるかを説くことが重要であり、そうした時代背景の中で、図書館の機能の一つである「読書に関する指導」を生活指導の一部、手段として位置づけようという考えが生まれたことは当然であったとも言えるだろう。

昭和20年代の学校図書館文献にみる生活指導の一部としての読書指導論と、それを軸とした学校図書館のあり方は、現代の学校図書館研究にとっても学ぶべき点は少なくないと筆者は考える。たとえば、(レベルは異なるが)敗戦直後の混乱期に犯罪の方法を詳しく書いた「悪書」が数多く出版されたように、現在も、自殺や殺人の方法を紹介したマニュアル本は存在する。「表現の自由」が保障される限り、これからも「悪書」「有害図書」類の出版は後を絶たないだろう。しかも、近年では、こうした情報は書物だけでなく、「有害情報」として、インターネット上でも大量に公開されている。こうした問題に対して、昭和20年代の学校図書館文献の一部が、「悪書」から子供を守る方法を「悪書」に触れることを禁止することに求めるのではなく、読書指導の役割に求めたことは大変興味深い。強い興味を弱くすることは難しい。しかし、「弱い興味を強くすることは比較的簡単である」というのは真理だろう。ならば「かれらがよみふけている望ましくない図書を禁ずるよりは、他の望ましい図書への興味をはげますべきである」⁸⁵。有害図書問題に対する学校図書館の機能は、児童生徒の「不振な方向に動機付け」し、「みずから新しい分野に興味を発見して、視野を広げさせるようにする」⁸⁶ ことにある。徒に規制を強めるのではない、こうした指導のあり方こそが、「読書の自由」「知る自由」を保障する立場にある学校図書

館としての役割であるだろう。

繰り返せば、「正しい、美しい、意味深い所望に多くふれていると、そのおもしろさ、よさ、味といったものが次第に理解され、くだらないもののくだらなさが自然と分かってくる。よくないものにおぼれたものを救う道は、正しいもの、美しいものをつつんでやるほり外にない」⁸⁷ のである。にもかかわらず、近年の自殺マニュアル本に対する各学校図書館の対応や、学校でのインターネット利用時におけるフィルタリングソフトの導入などをみると、先人の考えの方がはるかに先進的であったようにも思えてくる。「有害図書」「有害情報」の問題に対して学校図書館ができること、やらなければならないことがある。過去の文献は私たちに学校図書館と読書指導が持つ大きな可能性を改めて認識させてくれる。

4.2 「生活指導の一部としての読書指導」の問題点

しかし、昭和20年代に展開された「生活指導の一部としての読書指導」という考えには現代の図書館の理念とは相容れない問題点も確認できる。生活指導を学校図書館の機能に取り入れることについては、近年では、その効果だけでなく、「図書館の自由」「読書の自由」に関わる問題も指摘されているのである。

すでに述べたように、昭和20年代の生活指導の一部としての読書指導論では、児童生徒の読書の「質」（理解度、正しい読み方をしているか）を把握するために、学校図書館での個人読書記録を閲覧票や貸出記録、読書ノートなどを通じて収集し、その記録を学校図書館から学級担任などへ回覧することが提案されていた。しかし、こうした学校教育における読書記録の活用方法については、「図書館の自由」「知る自由」という観点から、近年、プライバシー保護上の問題を指摘する声が上がっている。たとえば、土居陽子氏は「子供が今、どんな本を読んでいるか知りたがる先生はよい先生だ。子供の全てを知っておきたいと思い、その為に読書記録を見たいと教師が思うのは当然で、記録を見せないなどという司書は困る」と現場の教員から言われた学校図書館司書のエピソードを紹介し、教員による生活指導目的での読書記録の閲覧問題への対応の難しさを指摘している。また、平中和司氏は、学校図書館において「読書指導という名の介入がある」として、教員の側に「子どもたちの実態にそくした読書指導のためには、個人カードを見てどんな本を読んでいるかを調べる必要がある、という発想になってしまう」と語り、多くの学校図書館が「個人情報」の「垂れ流しの状態」にあることを批判している⁸⁸。こうした問題は、第22回JLA学校図書館部会夏季研究集会などでも取り上げられている⁸⁹。

では、生活指導、読書指導を目的とした読書記録（閲覧記録や貸出記録）の利用にはどの

ような問題があるのか。第一に、読書に関するプライバシー保護の問題が挙げられる。一般に、私たちが図書館の本を借り出す際に、書名や氏名、住所などの個人情報を提供する理由(目的)は、公共財である図書の所在を常に把握し、管理する必要があるからである⁹⁰。個人情報保護の原則に従えば、図書館が利用者から預かった個人情報は、利用者に開示された目的の範囲で使用されなければならない。よって、それらの情報が、利用者に無断で興信所や企業へと売買されたり、図書を返却した後(管理の必要がなくなった後)も図書館内で管理されるようなことがあれば、それは大変な人権侵害行為となるだろう。図書館はあくまでも図書の管理のために利用者のプライバシーを一時的に預かったのであって、目的とは無関係にそれらを使用することは許されない。この問題について塩見昇氏は次のように記している。「貸出記録には(中略)本来の用途以外にいくつかの使われ方があり得る」。「しかし、利用者が資料を借りるためにのみ提供したデータは、資料が返却されれば本人に「返す」のが筋である。それを目的外に使うということは、本人がまったく予期していないことである」⁹¹。

このように、現代の解釈で言えば、個人の閲覧票や貸出記録については、本来は図書を管理するために利用者から集められる記録と考えられている⁹²。つまり、学校図書館の読書記録は本来生活指導を目的として集められる記録ではないのである。利用者の多くもまた、貸出記録が「人間を管理する」ための記録として利用されることは予期していないとすれば、学校図書館が管理する読書に関する記録についても、「"教育に必要な情報"の入手は、あくまでも本人が承知した上でなすべきであって、本人の知らない間に"こっそり"と入手すべきことではない。それが、人権に配慮した教育であり、学校図書館にもそうした運営が求められている」のである⁹³。残念ながら、昭和20年代の学校図書館文献にみる読書指導論にはこうした考えが欠落していると言えるだろう。

第二の問題点としては、読書のあるはずの学校図書館において自由な読書が困難になるのではないか、という懸念が挙げられるだろう。読書とは本来個人的な営みに属する行為であり、そこには当然、読書事実を「秘密」にしておきたいような行為も含まれているはずである。成長期に誰もが悩む「性」に関する本を手にとる場合でも、学校図書館では人目が気になってなかなかそれができない。しかも、自分の読書事実が逐一学級担任や生活指導担当者に回覧されているとすればなおさらであろう。現実には読書に関するプライバシー保護が蔑ろにされている学校では、「性に関する本などは、書架の影でだいたい読まれている」が、「貸出数は決して多くない」というように、「生徒の中には気軽に本が借りられない雰囲気」が生まれてしまうことも指摘されている⁹⁴。

しかも、こうした問題については、図書館員がいくら読書におけるプライバシー保護の

重要性を認識していても、そうした認識は図書館の外では通用せず、他の教員の共通理解が得にくいという事態があることも報告されている。学校図書館員がプライバシー保護の重要性を訴えてたとしても、「人に知られては困るような本を学校図書館に入れているのか」「学校の本を読むことが恥ずかしいのか」といった考えが教育現場には依然としてあると言われているのである⁹⁵。学校現場では「子供が今、どんな本を読んでいるか知りたがる先生はよい先生」であり、「子供の全てを知っておきたいと思い、その為に読書記録を見たいと教師が思うのは当然で、記録を見せないなどという司書は困る」という考え方も根強いという報告がある⁹⁶。図書館の常識は必ずしも学校の常識とは一致していないのであろう。

もちろん、教員による読書記録の管理がこうした問題を引き起こすことについての指摘が当時の文献に全くなかったわけではない。例えば、昭和20年代の読書指導論の先駆的役割を果たした『学校図書館の手引』の中にもすでに「読書の自由」に関する問題は取り上げられている。

「自由閲覧法を採用するに伴ってたいせつなことは、(中略)これをただ制度上にとどめないうで、気分の上からもくつろいで図書館が利用できるようにすることである。そのためには、何を読んでいるかを先生が調べているといった恐れや疑念を抱かせないこと、読んだ本について読後感を無理じいしないことなどに留意する」⁹⁷

「生徒が教師の「監督」を離れて、自由に、のびのびと活動できるように配慮されていること」(中略)、「学校図書館が「自分たちの図書館」となり、「楽しく本を読める場所」となることが学校図書館の活用せられる根本の要因である」⁹⁸

「読書を強制したり、図書の購入や管理に、命令するような、また監視するような態度で臨んだりすることは、最も戒むべきである」⁹⁹

こうした記述をみると、早い時期から、教員による読書記録の管理や読書行為への干渉が児童生徒の自由な読書を阻害する要因になるという問題意識があったことが分かる。

しかしながら、ここで述べられている懸念は、「恐れや疑念を抱かせない」ように留意することであり、教員が児童生徒の読書記録を生活指導目的で管理する行為そのものに対する禁止を意味するものではない。問題はのぞき見していることが児童生徒に知られるか知られないか、ということであり、読書に関するプライバシー保護の必要性そのものは問われないのである。繰り返せば、個人の読書記録が生活指導を目的として安易に教員へと回覧されるシステムの下では、どうしても自由な気分での読書はむずかしくなる。先に筆者は、生活指導の一部として実践される読書指導には児童生徒の「知る自由」「読書の自由」を保障する機能があると述べたが、学校図書館が管理する記録類を生活指導目的で活

用することには大きな危険性が含まれている。「読書の自由」と読書による生活指導と学校図書館の関係は実は大変危ういとも言えるのである。

昭和20年代の読書指導論にみるプライバシー保護の問題点はこれだけではない。上に紹介した文献の他にも、当時の読書指導の実践報告をみると、たとえば、読書指導の実践を報告する上で児童生徒の個人名やイニシャルを公開する文献は少なくないし¹⁰⁰、保護者の承諾なしに「家にどんな本があるかを調べよう」と各家庭(保護者)の読書傾向を調査したり¹⁰¹、担任が読書ノートを返却する際に、「読書傾向のよい者を学級児童に紹介」¹⁰²するという指導法も報告されている。他にも、よく書けている読書ノートを校内放送で教員が読み、「全校の生徒に知らせる」という提案もあり¹⁰³、読書記録が個人のプライバシーであるという考えはほとんど読みとれない。

生活指導はきわめて高度なプライバシー領域に踏み込んだ教育指導である。そこにプライバシーを守るべき立場にある学校図書館が関わる、という関係そのものがすでにいくらかの矛盾を孕んでいるとも言えるだろう。昭和20年代の読書指導論は、生活指導を目的とした児童生徒の読書生活の管理に重点が置かれ、生活指導が優先されるがあまり、「知る自由」「読書の自由」を守り、自由な読書行為を実現するための「プライバシー保護」という考えが欠落していた。昭和20年代の読書指導論から私たちが学ぶべきことは多い。ただし、「生活指導の一部としての読書指導」論をそのままの形で実践することはできない。現代の学校図書館において読書指導を生活指導と結び付けて実践するとすれば、第一に学校図書館におけるプライバシー領域を整理し、児童生徒の「読書の自由をどのように守るか」という問題について検討する必要があると言えるだろう。

おわりに

以上、本稿では昭和20年代学校図書館文献を手がかりとして「生活指導の一部としての読書指導」論を整理し、その現代的な意義と課題を考察した。繰り返せば、敗戦後の社会混乱を背景とした「悪書」の増加と児童生徒の不良化の問題は、「有害図書」「有害情報」問題と直面する現代の学校図書館が抱える問題に共通する部分がある。一方で、平成15年度からの司書教諭の配置は、学校図書館と教育、生活指導との距離をますます近づけ、「総合的な学習の時間」などの学習指導を通じて図書館運営に関わる教員もこれまで以上に増えることが予想される。こうした状況もまた専任職員の不在から各教員が図書館の運営に関わらざるをえなかった昭和20年代に共通するものがあると筆者は考える。今後、学校図書館を生活指導の場として活用するという考えが図書館の外部から再び聞こえるようになることもあるのではないか。「図書館の自由」「知る自由」とプライバシー保護の必要

性がほとんど定着していないように思える今日の学校図書館を取り巻く状況を考えると、かつての学校図書館研究の多くが、児童生徒の読書記録の利用について特に問題意識を持たなかったように、現代の教員がプライバシー保護の必要性和生活指導上の効果を天秤にかけ、後者を優先しないとは決して言い切れない。学校図書館研究は、改めて生活指導と読書指導の望ましい関係、さらには「図書館の自由」との関係を確認にする必要があるだろう。

学校図書館を中心とした読書指導には生活指導上さまざまな効果がある一方で、プライバシー保護上、そしてその背景にある「図書館の自由」「知る自由」を守る上で、その取り扱いにはさまざまな配慮が必要となる。昭和20年代の「生活指導の一部としての読書指導」論の研究を通じて、児童生徒の人権、プライバシーを配慮した読書指導と生活指導の望ましい関係とはどのようなものであるのか、という新しい問題が見えてきた。引き続き考察を進めていきたい。(2002.12.31)

<脚注>

¹ 鈴木英二著「(5)読書指導」『学校図書館年鑑』大日本図書、1956、p228

² 「戦後の教育と学校図書館運動年表」『学校図書館年鑑』大日本図書、1956、p355、全国学校図書館協議会『学校図書館50年史年表』編集委員会編『学校図書館50年史年表』全国学校図書館協議会、2001、p16

³ 文部省編『学校図書館の手引』師範学校教科書、1948

⁴ 後年、『学校図書館の手引』編纂の経緯を語った阪本一郎氏によると「当時私どもの見ることができた利用指導の資料は(中略)、2、3点しかなく、これらには読書指導の章がなかった。あちらの指導で作ったわが国の最初の「手引」に、読書指導の項を並列して入れたことは、歴史的に大きな意義を持つ」「地方では読書指導の必要が世論となってきたが、これはアメリカにはない指導領域だったため、領域概念の混乱が生じてきた」とし、『学校図書館の手引』における読書指導の方法論が日本特有のものであったことが明記されている。阪本一郎著「「利用指導」の定着」『学校図書館』213、1968.7、p53

⁵ 図書館教育研究会著『学校図書館学概論』改訂(学校図書館叢書第1集)、学芸図書、1953、p156

⁶ 「薄暗いところで本を読まない」「寝ころんで読まない」「食後に読まない(消化の妨げになる)」「読書の前に手を洗う習慣をつける」「唾をつけてページをめくらない」などの指導

⁷ 滑川道夫編著『学校図書館司書教諭実務』新光閣、1954、p139

⁸ 図書館教育研究会編『図書館教育－読書の指導－』(学校図書館叢書第2集)、学芸図書、1951、p5-6

⁹ 滑川道夫編著『学校図書館司書教諭実務』新光閣、1954、p1

¹⁰ 滑川道夫著「「学校図書館の手引き」編集の前後」『学校図書館』210、1968.4、p49

¹¹ 文部省編『学校図書館の手引』師範学校教科書、1948、p94

¹² 文部省編『学校図書館の手引』師範学校教科書、1948、p93

¹³ 滑川道夫著『青少年の読書指導』(ほうむらいぶらり教育の部5)、国土社、1949、p27-31

¹⁴ カストリとは「粕取り」「糟取り」と書き、「第二次大戦直後に盛行した米またはイモから急造した

粗悪な密造酒」を意味する。非常に強い酒であるため、3合で酔いつぶれてしまうとされた。これにかけて、おおよそ「3号」でつぶれていく(廃刊となる)雑誌を「カストリ雑誌」と呼んだ。

¹⁵ 秋田縣平鹿郡角間川町立角間川中學校著『学校図書館 運営と利用』秋田縣平鹿郡角間川町立角間川中學校, 1951, p47

¹⁶ 小淵沢中学校編『学習に直結せる学校図書館経営の実際』暁教育図書, 1952, p30-31

¹⁷ 秋田縣平鹿郡角間川町立角間川中學校著『学校図書館 運営と利用』秋田縣平鹿郡角間川町立角間川中學校, 1951, p4

¹⁸ 尾原淳夫著『學校圖書館經營の在り方』駸々堂, 1950, p91

¹⁹ 成蹊小学校読書研究会編『読書指導の実践』牧書店, 1951, p1

²⁰ 成蹊中学校読書研究会編, 滑川道夫代表『読書指導の実践』牧書店, 1951, p3

²¹ 滑川道夫著「対談読書指導について」『生活学校』1948.11, p2

²² 成蹊中学校読書研究会編, 滑川道夫代表『読書指導の実践』牧書店, 1951, p3

²³ 図書館教育研究会編『中学生の読書指導』(学校図書館学叢書別冊), 学芸図書, 1952, p4-5

²⁴ 小淵沢中学校編『学習に直結せる学校図書館経営の実際』暁教育図書, 1952, p30-31

²⁵ 西村二郎氏の調査によると、貸本屋で中学生が多く読む図書は「(男子) 魔城の鉄仮面、謎の透明世界、二十面相、まぼろし城、右門捕物帳、密林の王者、里見八犬伝等、(女子) からたちの花、嵐の孤児、家なき子、白鳥は悲しからずや、むらさき草紙等」となっている。男子の読み物は英雄主義に偏り、女子の読み物は自己の優越感を満足させるような作品が多く、生徒に正しい「価値認識を与える」必要がある。「読書指導の課題—中学校の場合」『生活学校』1948.11, p23-25

²⁶ 滑川道夫著『こどもの読書指導』(ほうむらいぶらり教育の部), 国土社, 1949, p31-32滑川氏の調査によると、戦前の漫画の読書比率は全体の11%、戦中は7%、戦後は46%、時代講談は戦前2、戦後13となる。これに対して童話は戦前33、戦後7と減少、科学書も戦前22、戦後4と減少している。

²⁷ 塚原亮一著「読み過ぎる子と読まない子」『児童と読物』(児童問題新書21), 金子書房, 1951, p70

²⁸ 日本放送協会編著『学校図書館の建設』(新教育講座第2巻), 新教育講座刊行会, 1950, p25

²⁹ 昭和20年代の多くの学校図書館文献に紹介されている事件。

³⁰ 『朝日新聞』昭和27年2月17日3面 少女の顔写真と住所・氏名は削除した。

³¹ 阪本一郎著, 図書館教育研究会編『中学生の読書指導』(学校図書館学叢書別冊), 学芸図書, 1952, p72

³² 関野嘉雄, 滑川道夫著「対談読書指導について」『生活学校』1948.11, p7 滑川の発言より。関野は滑川の意見に対して「それは希望的観測ではないかな。というのは、雑誌なんかにおける漫画の掲載量は増加する一方だ。単行本の漫画がどのくらいになっておるか、最近調査してみないが、雑誌だけを見ればひどい。少なくとも漫画は下火になっておらぬという気がする」と述べる。

³³ 愛知県丹波郡大口村立大口北小学校編『学校図書館教育に於ける読書指導の実践』愛知県丹波郡大口村立大口北小学校, 1953, p70 漫画のよい点としては「勉強漫画などは理科のことがおぼわる」「勉強で疲れた時にちょっと漫画をよむとスツとする」「サザエさんなどはとんちがあって、ほがらかでよいと思う」などの意見が挙げられている。

³⁴ 野村純三著「児童文化をめぐる学級経営C高学年」『生活学校』1948.9, p22

³⁵ 野村純三著「児童文化をめぐる学級経営C高学年」『生活学校』1948.9, p22

³⁶ 図書館教育研究会著『学校図書館学概論』改訂(学校図書館叢書第1集), 学芸図書, 1953, p160

³⁷ 野村純三著「漫画への偏向をみちびく—三年生を対象とした」『読書指導の実践』牧書店, p206

³⁸ 図書館教育研究会編『中学生の読書指導』(学校図書館学叢書別冊), 学芸図書, 1952, p72

- ⁴⁹ 藤本一郎著「学校・学級文庫の設置」『生活学校』1948.11, p14
- ⁵⁰ 西村二郎著「読書指導の課題—中学校の場合」『生活学校』1948.11, p26
- ⁵¹ 児童研究会編『児童と読物』（児童問題新書21），金子書房，1952, p16
- ⁵² 阪本一郎著，児童研究会編『児童と読物』（児童問題新書21），金子書房，1952, p16-17
- ⁵³ 日本放送協会編著『学校図書館の建設』（新教育講座第2巻），新教育講座刊行会，1950, p24
- ⁵⁴ 阪本一郎著「読みものの与え方」『児童と読物』（児童問題新書21），金子書房，p17
- ⁵⁵ 管忠道著「わるい読物」『児童と読物』（児童問題新書21），金子書房，p104
- ⁵⁶ 森秀雄著『読書相談—読書指導の進展のために』牧書店，1952, p114-115
- ⁵⁷ 森秀雄著『読書相談—読書指導の進展のために』牧書店，1952, p115
- ⁵⁸ 図書館教育研究会編『中学生の読書指導』（学校図書館学叢書別冊），学芸図書，1952, p4-5
- ⁵⁹ 読書療法「読書を通じて、人格性の諸問題の解決、促進をはかろうとする読書指導」『最新図書館学事典』学芸社，1984, p144
- ⁶⁰ 井内龍二著『読書指導の計画と実践』明治図書出版，1953, p24-25
- ⁶¹ 図書館教育研究会編著『図書館教育 読書指導の手引』（学校図書館学叢書第2巻）学芸図書，1955, p318、滑川道夫著『こどもの読書指導』ほうむらいぶらり教育の部，国土社，1949, p66-68、井内龍二著『読書指導の計画と実践』明治図書出版，1953, p15-17 など
- ⁶² 田染中学校編著『学校図書館教育の実例 学習活動に図書館を如何活用するか』田染中学校,1952, p14-15
- ⁶³ 滑川道夫編著『学校図書館司書教諭実務』新光閣，1954、尾原淳夫著「司書教諭制は時期尚早か」『図書館雑誌』Vol.47(6), 1953.6 など
- ⁶⁴ たとえば、大阪市の昭和25年の統計によると、図書館主任、係教官の配置は一応進められているが、専任事務職員、助手の数は小中学校では0人、高校では0名～1名が大半となっている。（大阪市教育委員会編『昭和23年度・24年度比較による大阪市学校図書館の実態』大阪市教育委員会，1950, p22-24）
しかもその後の調査によると、昭和25年度から27年度にかけて「図書館主任の一週の担当授業時数は次第に増加の傾向をたどっている。中学校では24時間担当者の人数が最も多く、高等学校では18時間担当者の人数が最も多い。これだけの授業を担当すれば、指導のための教材研究で図書館に手を延ばす余裕はほとんどなくなってくる」（尾原淳夫著「司書教諭制は時期尚早か」『図書館雑誌』Vol.47(6), 1953.6, p8）
- ⁶⁵ 鳥生芳夫著『私たちはこうして学校図書館を作りました』蔓世書房，1949, p82
- ⁶⁶ 阪本一郎著，図書館教育研究会編『中学生の読書指導』（学校図書館学叢書別冊），学芸図書，1952,p208
- ⁶⁷ 加藤宗厚著「学校図書館の基本問題」『図書館雑誌』Vol.47(1), 1953.1
- ⁶⁸ 秋田縣平鹿郡角間川町立角間川中學校著『学校図書館 運営と利用』秋田縣平鹿郡角間川町立角間川中學校，1951, p24 角間川中学校ではこうした考えの下で、司書業務の責任者を「週番」制とし、「学校の風紀や清掃などの週番と同一のもの」としている。
- ⁶⁹ 児童生徒1人ごとに作成される貸出カード。貸出日、書名などが記載される。当時の多くの学校では、ブックカードの他に、この個人読書カードの記載が義務づけられていた。カードはカウンターにて管理される。
- ⁷⁰ 愛知県丹波郡大町村立大町北小学校編『学校図書館教育に於ける読書指導の実践』愛知県丹波郡大町村立大町北小学校，1953, p20

- ⁶¹ 東京学芸大学第一師範学校附属小学校編著『小学校の図書館教育』学芸図書, 1949, p120
- ⁶² 鳥生芳夫著『私たちはこうして学校図書館を作りました』蔓世書房, 1949, p50-51
- ⁶³ 京都市立旭丘中学校(京都市立旭丘中学校編『私たちの図書館』京都市立旭丘中学校, 1950)、第一中学校(木村トシ子著, 石田佐久馬編『学校図書館の設営』福村書店, 1954)、天理学園学校(天理学園学校図書館研究会編『小学校から大学まで図書館科の研究』養徳社, 1950)
- ⁶⁴ 小淵沢中学校編『学習に直結せる学校図書館経営の実際』暁教育図書, 1952, p252 このカードは「個人の読書した図書を順次書きつらね、一覽的に自己の読書コースを反省し、自己評価がなされると共に、教師の評価の大切な資料になる意味で貴重な役割をもっている」(出典には氏名が明記されているが、実名偽名の判断が付かないため、ここでは記載しない)
- ⁶⁵ 滑川道夫著『こどもの読書指導』(ほうむらいぶらり教育の部), 国土社, 1949, p235 (浜松市追分校)
- ⁶⁶ 滑川道夫著『こどもの読書指導』(ほうむらいぶらり教育の部), 国土社, 1949, p236 (磐田北校)
- ⁶⁷ 鈴木英二著「(5)読書指導」『学校図書館年鑑』大日本図書, 1956, p231
- ⁶⁸ 図書館教育研究会編『小学生の読書指導』学芸図書, 1953, p232-236 「読書遅滞(力足らず)」とは「地方が低くて、他の成績もかんばしくない」状態。「読書不振(読書嫌い)」とは「ぜんぜん読めないのではない。知能も低くなく、他の成績はそうとうに上がっている。そのくせ読まない。読もうとしない。読ませてもおもしろくないといってすぐやめてしまう」状態。図書館教育研究会によると、「読書病」にはこの他に「読書偏向(びっこ読み)」「読書不安定(だるま読み)」「読書早熟(おませ読み)」「読書分裂(読書きちがい)」がある。
- ⁶⁹ 読書理解度を知るための方法としては、読書ノートの他に「読書テスト」も提案されている。「理解の度を見るために、一定の図書についてテストを作るのもよい。それは簡単に回答されるもので児童生徒の理解の状況が評価されるものでなければならない」(図書館教育研究会著『学校図書館学概論』改訂(学校図書館叢書第1集), 学芸図書, 1953, p166)
- ⁷⁰ 立野興市編集『本校図書館経営の実際』第1編, 金沢市立中村小学校, 1950, p31-32
- ⁷¹ 井内龍二著『読書指導の計画と実践』明治図書出版, 1953, p206-208 京都市立修徳小学校
- ⁷² 今村秀夫著「学校図書館とホームルーム指導」『学校図書館運営の実際と読書指導』西荻書店, 1950, p97
- ⁷³ 図書館教育研究会編『小学生の読書指導』学芸図書, 1953, p146
- ⁷⁴ 阪本一郎著『読書相談—読書指導の進展のために』牧書店, 1952, p27-28
- ⁷⁵ 関野嘉雄, 滑川道夫著「対談読書指導について」『生活学校』1948.11, p8 (関野の発言より)
- ⁷⁶ 昭和20年代後半から「娯楽書」については、読後感を強要する必要はないという意見も現れる。
- ⁷⁷ 鶴時雄著「学校図書館の帳簿と事務処理」『学校図書館運営の実際と読書指導』西荻書店, 1950, p253)
- ⁷⁸ 阪本一郎著『読書相談—読書指導の進展のために』牧書店, 1952, p29 学校図書館での読書指導法に関する文献を多く出版していた牧書店から発売された1冊25円の「読書ノート」
- ⁷⁹ 田染中学校編著『学校図書館教育の実際 学習活動に図書館を如何活用するか』田染中学校, 1952, p9 本様式では読んだ図書の総額(1冊読む毎に合計)を算出し、卒業までに「何十円の本を読んだことになるか」が分かるようになっている。
- ⁸⁰ 井内龍二著『読書指導の計画と実践』明治図書出版, 1953, p207 (京都市立修徳小学校)
- ⁸¹ 滑川道夫編著『学校図書館司書教諭実務』新光閣, 1954, p181 (大阪市立長浜小学校)
- ⁸² 滑川道夫編著『学校図書館司書教諭実務』新光閣, 1954, p184 (八王子市立第五小学校)
- ⁸³ 朝倉正春著「中学校読書指導の実際」『学校図書館運営の実際と読書指導』西荻書店, 1950, p164

- ⁸⁴ 遠藤英三執筆, 全国学校図書館協議会編『学校図書館経営の工夫』明治図書出版, 1959, p60
- ⁸⁵ 図書館教育研究会著『学校図書館学概論』改訂(学校図書館叢書第1集), 学芸図書, 1953, p160
- ⁸⁶ 図書館教育研究会編『中学生の読書指導』(学校図書館学叢書別冊), 学芸図書, 1952, p72
- ⁸⁷ 野村純三著「漫画への偏向をみちびく—三年生を対象とした」『読書指導の実践』牧書店, p206
- ⁸⁸ 平中和司著「学校図書館とプライバシー—長野県の効率小中学校の様子から—」『図書館界』50(2), 1998.7, p60
- ⁸⁹ 中島彰子著「学校図書館と個人情報・教育の中のプライバシー—第22会JLA学校図書館部会夏季研究集会報告」『図書館雑誌』86(11), 1992, p802
- ⁹⁰ 「図書館が利用者を特定図書と結びつける理由(何らかの貸出方式に基づいた貸出を行う理由)は、図書館資料を適切に管理するため」である。渡辺重夫著「個人情報の保護と学校図書館—プライバシー権と結びつけて(2)」『学校図書館』492, 1991.10, p67
- ⁹¹ 塩見昇著「プライバシーの尊重」『学校図書館』507, 1993.1, p30-31
- ⁹² 収集当初から、読書指導、生活指導を目的に集められる読書ノートについてはひとまず置く。
- ⁹³ 渡辺重夫著「個人情報の保護と学校図書館—プライバシー権と結びつけて(2)」『学校図書館』492, 1991.10, p67-69
- ⁹⁴ 平中和司著「学校図書館とプライバシー—長野県の効率小中学校の様子から—」『図書館界』50(2), 1998.7, p59
- ⁹⁵ 平中和司著「学校図書館とプライバシー—長野県の効率小中学校の様子から—」『図書館界』50(2), 1998.7, p59
- ⁹⁶ 土居陽子「学校図書館の日常活動における「図書館の自由」を考える」『図書館界』37(3), 1985.9, p103
- ⁹⁷ 文部省編『学校図書館の手引』師範学校教科書, 1948, p52
- ⁹⁸ 文部省編『学校図書館の手引』師範学校教科書, 1948, p83
- ⁹⁹ 文部省編『学校図書館の手引』師範学校教科書, 1948, p112
- ¹⁰⁰ 京都市立修徳小学校編『本校における読書指導の実践』修徳小学校, 1952, p240-241、井内龍二著『読書指導の計画と実践』明治図書出版, 1953, p255-279 5年男子の1ヶ月の図書館利用状況を書名入りの一覧表で紹介、読書不振児6年男子の事例研究(知能指数、家庭環境、身長体重なども紹介)など
- ¹⁰¹ 京都市立葵小学校編『本校教育と葵図書館』京都市立葵小学校, 1951, p174 学級文庫創設の際に、「じぶんの家にある読み古した本をもってくる。大人の読む本を持ってくる」という指導を行っている。
- ¹⁰² 佐藤茂著「私のよんだ本—一年生の読書指導の出発」『読書指導の実践』牧書店, 1951, p106 「中村君は、もう5冊も読んでいます。ずいぶんがんばっていますね。その中に世界名作読本や、アリババのがありますが、これはとてもいい本です。こういういい本を読む人はえらいなあ。中村君、アリババってどんなお話でしたか」
- ¹⁰³ 滑川道夫編著『学校図書館司書教諭実務』新光閣, 1954, p159